

非常用リチウムイオン電池電源装置開発と、まちづくりへの展開のためのアート作品制作

主催団体 / Public Studio

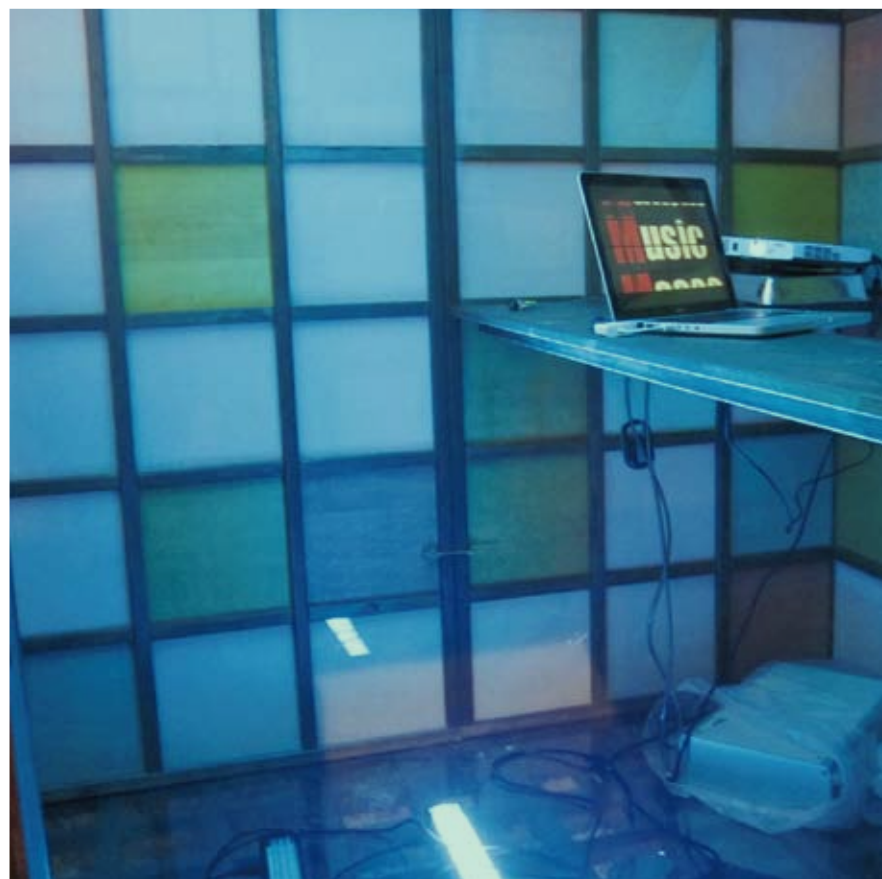
【団体概要】

ある時はデザインオフィス、ある時は学生との制作活動のワークショップ、またある時はサテライト研究室、という場をつくるために大学教員が設立。公と個人、教育と実務、大学と地域をつなぎ、ひらかれたデザインを目指して活動中。

【事業概要】

浜松市に拠点を構える株式会社ナユタが開発した非常用リチウムイオン電池電源装置^{*}のデザインとまちづくりと絡めた公共利用の可能性を探るプロジェクト。全国各地で行われる地域と連動したアートプロジェクトにおいて活躍するアーティスト・住中浩史を招聘し、大学生と共にワークショップを実施。まちのさまざまなシーンにおいて使ってもらえるような装置とはどのようなものか？をベースに、アイデア出し、制作を行った。実際に浜松市中心部で開催されたイベント会場に完成品を持ち出しての利用もあった。また、地域のデザイナーや技術者と協働して、電源装置をベースにしたLEDライティング装置を制作した。

^{*}550whから3300whまで4種類のサイズがある。



9月に開催された「Hamamatsu Music Messe 2013」会場に現れた「KAKURE BAR」は、一坪の光の立体である。LEDを内蔵した照明であると同時に、ミニキッチンとバーカウンターがついて屋台のように使用することができ、中に入ってくつろぐこともできる。と同時に、キャスト付きでその場の移動も簡単なら、解体して軽トラックでどこにでも運ぶことができる、移動可能な空間である。

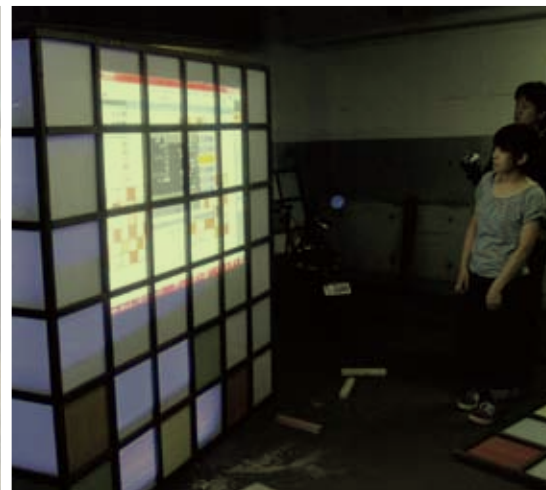
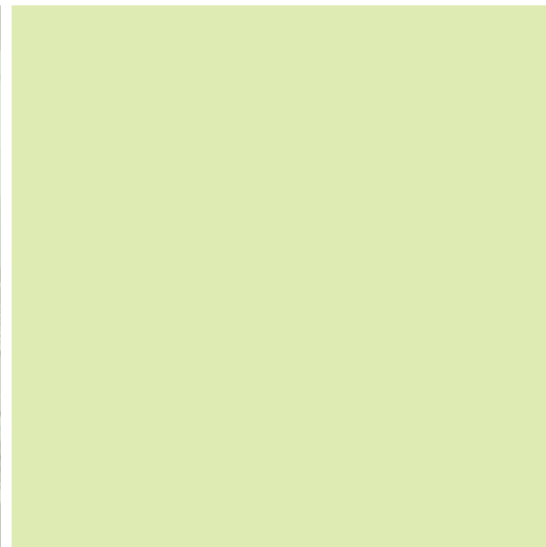
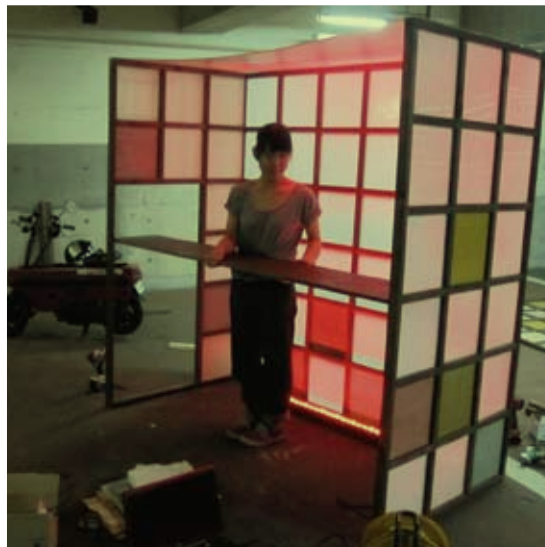
「都市の照明であること」と同時に「都市の隠れ場所」であることをコンセプトに、電動工具を持ち歩いてどこでも木工でアート作品を制作するアーティスト住中浩史さんとパブリックスタジオを主宰する磯村克郎さん、そして静岡文化芸術大学の学生たちが協働して、手づくりでつくりあげた。

「KAKURE BAR」によって、市民が行うイベントの支援をすることをプロジェクトの出発点にしていたところ、「夜のイベント会場をライトアップすることができないか」と磯村さんに相談がもちかけられた。

「KAKURE BAR」には、100Vの家庭用交流電気が使える非常用リチウムイ

オン電池電源装置が使われている。この電源装置は、天竜川沿いに拠点を置く株式会社ナユタが製造しているもので、もともと医療用に開発されたために、ノイズの少ない“きれいな電気”が供給でき、音楽の再生に使用する際にも“音が良い”と評判なのだそうだ。「一般家庭でも、非常用電源装置として使えるもの」と磯村さんは言う。静岡文化芸術大学の生産造形学科教授でもある磯村さんは2年前からナユタと産学共同プロジェクトを行っており、商品開発やプロモーション提案などを学生たちとともに積み上げてきたことも、今回の電源装置使用のきっかけともなっている。住中浩史さんの電動工具もこの電源装置で動かしたのである。

「ナユタは社長を始めとして社員がみな元気があふれ、技術開発力もすごい。企業として地元貢献をしっかりとやっていきたいという思いがあり、地域のことを考えていることは確かだと思います。もっと積極的につくっている“もの”と“まち”が出会えたらいい」と磯村さんは考えていた。思いはあっても企業からはなかなかまちと接点を持ちにくいという現実がある。



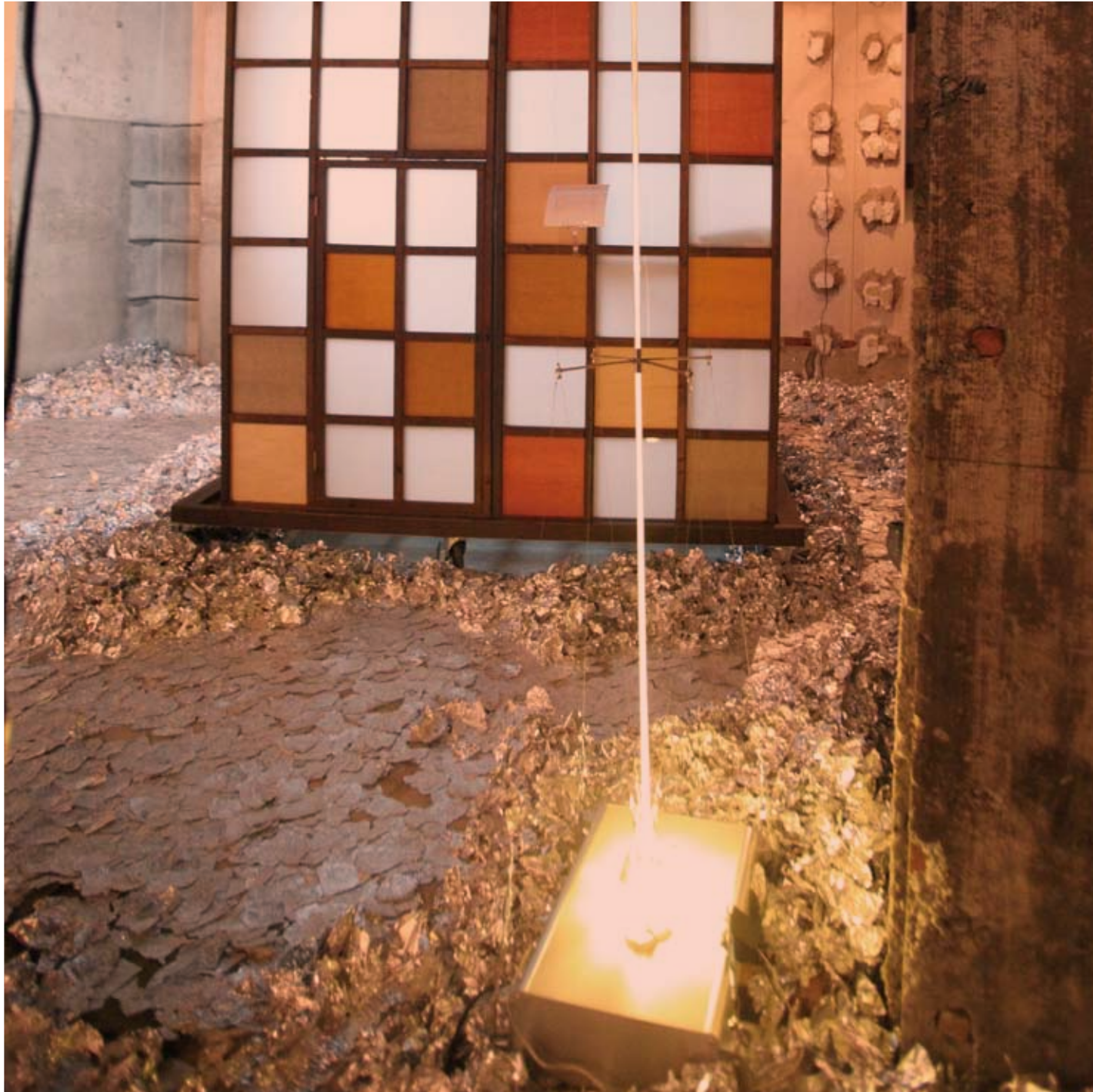
産学協同プロジェクトで地元企業の支援と学生の育成を行うことには大きな意義があるが、それに加えて、まちとの接点を持つことで、企業にも学生にもまちの人々にも、それぞれに新しい視点をもたらすことができないだろうか。実際にものをつかってまちなかで実験し機能させることで、学生には得てもらうものがあるだろう。そこから見えてきたことを、企業には現場リサーチとしてフィードバックしていくことができるのではないかと。

この考えから生まれたのが、パブリックスタジオという自由な場で、実際にものをつくり、まちに投入してみることで、企業と大学とまちを緩やかにつなげるという試みである。

「パブリックスタジオの活動では、意識的に市民目線で“公共の PRODUCT”を考えていこうとしています。公共のデザインは行政や都市計画という大きな目線でつくられることが多いのですが、僕はヒューマンスケールの“もの”がまちを変えていく力を持っていると思っています。人間が身体を

持ち、身体と接する世界がある限り、人の行動から PRODUCT を考えていかなければなりません。PRODUCT デザインというのは、人間とものの接点という、最後の着地点の造形から成り立っていくものです。今後の“公共のデザイン”は、僕ら市民が公共をどう考えるか、ということ前提にした上でものをつくっていくことになるでしょう。

クリエイティブな視点と技術の視点、まちと人の行動の視点、まちと企業という視点、教育とまちという視点、さまざまな視点は交錯するが、必ずしも常に1点に交わるわけではない。その1点が交わることを多様な視点から試みていくことで“公共の PRODUCT”ができれば、まちの人々には楽しさや使いやすさ、企業にとっては商品やサービスの可能性、学生にはつくることと使ってもらうことの実感が感じられることになる。“公共”を考え直し、そこにある“モノ”と人の関係を考えるこの小さなプロジェクトが、未来のまちの風景にもたらす可能性は大きい。(Sh)





KAKURE BAR

2013

作品制作:住中浩史(アーティスト)+静岡文化芸術大学デザイン学部生産造形学科学生+Public Studio

協力:株式会社ナユタ

「Hamamatsu Music Messe 2013」(2013年9月14・15日)

CROSS BAR

2014

作品制作:Public Studio 協力:株式会社ナユタ

「Projectability」(2014年3月1~23日)